

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 内村 博信

本論文において集中的に論じられるのは、副題にあるように、ベンヤミンが専ら「書物」を対象に思考を繰り広げていた『ドイツ悲劇の根源』までの初期著作である。著者は初期ベンヤミンが取り組んだ思想的課題を、「近代市民社会のかかえる矛盾がさまざまなかたちで噴出する時代に、近代市民社会がどのような特徴をもつのか、どのような原理のもとに形成されているか、その原理はどのような問題を内包しているのか、どこに再構築のための視点を見いだせばよいのか、という問題を、芸術批評、法、言語の領域において問いかける」ことである、と定める。そこでベンヤミンの初期著作の精緻な解説から「近代」に潜む「神話的なもの」が摘出され、それに抗する力を潜在させるものとしての「言語」という対立図式が浮かび上がる。「神話的なもの」の支配から解放する力の在り処、というこの言語観を支えているのが、ベンヤミン固有の歴史哲学であり、その実践が「批判＝批評」であるとされる。第一章は、ドイツ市民社会の勃興期である 1800 年前後の文芸作品、批評、美学理論から、形象化作用と形象解体作用という二つの力の拮抗関係を読み取り、それらの歴史的意義と限界を指摘しもするベンヤミンが、そこから自らの芸術論を歴史的・動的な「批判＝批評」として鑄上げてゆく経緯を説得的に論じている。第二章では、法措定的暴力と法維持的暴力という、「法」に内在する二つの「神話的暴力」の錯綜を論じるベンヤミンの『暴力批判論』、およびその周辺テキストが 1920 年代の法学、政治学の議論文脈と関係づけられたうえで、法の暴力の彼方に「神的暴力」という正義の顕現可能性を示唆するベンヤミンの論理とそれに対する批判とが、高い精度で検証される。第三章は、伝達手段という「道具的」言語観を斥け、表現と伝達が根源において一つであるとするベンヤミンの言語理論を、他の言語理論との対比から詳述したうえで、諸言語の類似ではなく「非類似」に根拠を置くその翻訳論を整合的に説明している。『ドイツ悲劇の根源』のバロック演劇論を、第一～第三章でなされた議論をもとに、その拠って立つ神学上の前提から再構成する第四章は、質量ともに豊かである。終章は、作品の社会性の解明と固有性の歴史的救出という「批判＝批評」の二重の課題を明らかにし、論文全体を締めくくる。ベンヤミンの思想を、彼の初期著作の精読によって再構成するという企図に、本論文は相応しく構成され、また十分叶った内容を有している。総じて非常に高い水準でベンヤミンの初期思想の解明に成功していると評価できる本論文であるが、ベンヤミンが課題としたとする近代市民社会の本質と限界の解明が特に第四章において必ずしも十分とはいえないこと、ベンヤミン自身の文章表現に寄り添いすぎるあまり理路がやや不鮮明になる部分が散見することなど、いくつか惜しまれる点がある。しかし、いずれも本論文の達成を大きく損なうものではない。以上に鑑みて、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に相応しいものと判断する。